#### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

#### フォイエルバッハにおける人間学の意図と限界

末次, 弘 九州大学文学部:助手

https://doi.org/10.15017/27411

出版情報:哲学論文集. 3, pp. 33-51, 1967-09-30. 九州大学哲学会

バージョン: 権利関係:

まず、

しか存在しえない。

たし

1

## オ イエ ルバ 'n ハ における人間学の意図と限界

末

次

弘

ろう。なぜなら、一般にフォイエルバッハの哲学は人間学として特徴づけられているから。 とその核心を明らかにすることができるであろう。同時に、その作業は私をフォイエルパッハの哲学に近づけるであ フォイエルバッハが人間をどのように捉えているかを明確にすることによって、フォイエルバッハの人間学の意図

の人間とは人間の土台としての自然を含めた人間である。この場合、「人間の土台としての自然」とは身体にほかな

フォイエルバッハにおいては、人間が哲学の対象である、しかも唯一の、普遍的な、

最高の対象である。

限性の意識である。しかるに、わたしの自我性の無制限性が打ちくだかれる最初の躓きの石は汝、即ち他我である。わ らない。なぜなら、フォイエルバッハにおいて、自然は事実存在から区別されない本質であり、人間は事実存在から 自己を区別する本質であるから。ととろで、身体は感性的なものである。感性的なものは時間と空間における一点に エルバッハにおいても、世界は無人の世界ではなく、他の人間が共に存在する世界である。 が世界に依存していると感じるのは、 したがって、身体をそなえた人間は世界のなかに存在する。世界についての意識はわたしの被制 わたしがまず、 他人に依存しているのを感じるからである。 だから、 フォ

抗をみいだす所でだけ、である。それ故、全的な人間、即ち、世界の中に、他人と共に在る、身体をそなえた、生き 者(Wesen)がわたしに与えられる所でだけ、即ち、わたしの自己活動が他の存在者の活動においてその限界を、抵 た人間がフォイエルバッハにおける哲学の客体であり、また、哲学の主体である。 ならざるもの (Nicht-Ich) にである。そのさい、現実的な客体がわたしに与えられるのは、わたしに働きかける存在 で存在する理性などが思惟するのではない。しかも、或る客体が与えられるのはわれ(Ich)にたいしてでなく、 て、自我や、抽象的な精神などではない。 思惟するのは身体をそなえた、 生きた人間であって、 自我や、 それだけ 他方、フォイエルバッハに おいて、 このような人間を対象とする哲学の主体、 荷い手は同様に 全的な人間であっ

造的に捉えようと思う。 っと立ちいって明確にするため、いま素描したばかりの全的な人間を、フォイエルバッハの著作に即して分節し、構 た。当然のことながら、この素描はフォイエルバッハの捉えている人間をその輪郭においてしか、示していない。も 分節するにあたって、 フォイエルバッハの哲学全体において人間の占める位置を、私は確定した。次に、その人間の特徴を素描し 『哲学改革のための暫定的提言』にみられる次のような言葉を手掛りにすることができるよ

即ち無限なものとして認めるととである。この言葉にしたがえば、人間は有限なものであり、 うに惟われる。 おいて人間の本質とはいかなることを指し示しているかを明らかにすることから始めねばならない。 ものの真の本質である。有限な人間において、無限なものとは人間の本質である。したがって、 る。有限な人間において、無限なものとはなにを指しているのか。フォイエルバッハによれば、 ところで、 フォイエルバッハにとって、 人間の本質は 人間の人間との結合のうちに、 統一のうちにしか存在しな 「哲学の課題は無限なものを有限なものとして認めることではなく、有限なものを有限でないもの、 フォ 無限なものは有限な かつ無限なものであ イエルバッハに

類(Gattung)の概念に求められる。

それ故、

人間の本質とはどのようなものであるかを明らかにする前に、

存在構造の点で、

一個の人間において他の人間がなんらかの仕方で問題となる根拠は

フォ

イエル

バ

ッ

フォイエの場合、

絶対的な本質ではない。 かなる存在も、 分だけ孤立した人間は自己のうちに道徳的本質としても、 真理と完全性はたゞ、本質の等しい本質問の結合、統一だけである」人間の人間との結合: それが人間であれ、 神であれ、 また精神であれ、それ自身だけでは真の本質、 思惟する本質としても、 人間の本質をもっていな 完全な本質、

間との結合、 12 統一とはなにを意味しているか。しかし、それを確定する前に、 おいて他の人間がなんらかの仕方で問題となる場合の存在構造を意味するのか。言葉の上だけでは前者を意味する 統一とは或る人間と他の人間とのなんらかの結合、 統一の状態を意味するのか、 私は次の問いを先決しなければならない。 それとも、 人間の人 個の人間

私はフォイエルバッハの記述をとおして、直接、今、との問いを確定しないでおくことにする。

な

ように読めるが、

考察とは言えないであろう。したがって、人間の人間との結合、統一は後者であると仮定しても不当ではないであろ しても、 ぜなら、 て他の人間がなんらかの仕方で問題となる場合の存在構造をみきわめ、そこから前者を論じるのでなければ、 に惟われるから。 或る人間と他の人間との結合、統一の状態は後者に基づいてのみ成立するのであるから、 フォイエルバッハの記述は不充分だし、また、この点でフォイエルバッハの人間学の限界が問題となるよう それにしても、もし人間の人間との結合、 統一がフォイエ iv ハ ッハにおいて前者を意味していると 一個の人間におい 厳密な

ッハにおける類の概念を明確にするのが適当であるだろう。

āŧ

- (F) Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie. S.240
- Das Wesen des Christentums. (L.Feuerbachs Semtliche werke, neu herausgegeben von Bolin und Jodl S.99~S.100
- ② Das Wesen des Christentums. S.99~S ③ Grundsätze der Philosophie der Zukunft

S . 296

Worläufige Thesen zur Reform der Philosophie. S.2:

S.318

⑤ Grundsätze der Philosophie der Zukunft. ὧ FbJ € 210

# 二、フォイエルバッハにおける類の概念

これら類的能力が帰属する。そのさい、人間はこれら諸力を持つのではない。そうではなくて、これらは人間が持つ る。とれらは人間において類を構成するものである。したがって、理性、意志、心は類的能力である。一個の人間には フォイエルバッハに よれば、人間の本質である ところのものは理性 (Vernunft)、意志 (Wille)、心 (Herz) であ 作りだすこともできない人間の木質を基礎づけるものである。これらは一個の人間が成立するその基点に、

人間の意志を超え、絶対的に帰属する諸力である。したがって、これら諸力が人間を規定し、支配し、生気づけるの

2

確かに万人のうちに在る同一の力が各人のうちに在るのだが、 限の集合 (Menge) は多様な諸個人の無限の充溢、或いは無限の集合においてだけ実現され、確証される。なぜなら、 な述語からなる無限の富であるが、述語は感性においてのみ、つまり時間と空間においてのみ存在するので、 総括されるときにだけ、その事実的存在をもつ。換言すれば、現実に多様な諸述語の無限の充溢 を意味する。総体としての類が人間の木質である。との総体としての類、即ち人間の本質は類の諸規定が万人の中で フォイエルバッハにおいて、類とは個がそこにおいて在る一時代の人間の絵体、及び過去と未来の全人間 性質づけられているから。各々の新たな人間はいわば人類の新たな述語である。それで、人間の本質は多様 同一の力は固有な力、新たな力として現われるよう規 (Fülle)、或いは無

類の概念をこのように総体として捉えるフォイエルバッハは類と個との直接的な統一を拒絶する。 彼によれば、

+

多様な諸個人からなる無限の富である。

限されたものとなるであろう。

ところで、

1

-エルバ

ッハによって設定されたとの二つの条件が除かれるとき、

類的能力

力は無限

制

類的能力が現実的に存 でなくなり、

しかるに、この二つの条件は必然的に排除される。なぜなら、

と個との直接的な統一は理性と自然との限界を超えている。類と個との直接的な統一は実在性のない、 確な表現はキリストである。しかし、 に異なる人格的本質として捉えられている。 個体は類の意義をもち、 それだけで 類の完全な 現存在とみなされてい は、多様な述語の無限な多が人間の本質から分離され、一つの独自な本質へと結合され、この木質が人間とは根本的 類として、つまりあらゆる性質の総体として、 IJ スト教の神は類と個との直接的統一である。 つまり、個体は直接的に類と同一視され、 キリスト教的キリストは歴史の中点ではなく、歴史の終点である。 かつ同時に 個人的個別的本質であるような 類の概念である。 類が個に解消されている。この類と個との直接的な統一のもっとも明 キリスト教において、 神は個体としての類の概念である。 理性に反する それ故、類 即ち、 そこで 神は

#### 三、 個 ے 類 ے の 関 係

能力である理性、意志、心はフォイエルパッハによれば、類の本質において、またそのものとして、無限であ

表象である。

とって不可能で、捉えることのできないことも、次の時代には捉えることができ、可能である。また、類的能力がそ をもっているからである。例えば、もしわたしが無限なるものを思惟するとすれば、わたしは思惟能力の無限性を思 識は制限されている。 り、完全である。類の本質において無限であるのは、絵体としての類は無限であるからである。例えば、わたしの知 のものとしては無限であるのは、あらゆる本質は自己にたいしては無限であり、自己自身のうちに自分の最高の本質 かつ確証しているのである。 しかし、わたしの制限は他人の制限ではない、いわんや、人類の制限ではない。 或る時代に

限性はいかなる仕方で、個体としての人間にとって対象となるのだろうか。フォイエルバッハによれば、他者をとお 制限されている。このように制限されている個体としての人間は事実、自分を制限されたものと感じたり、 ないからである。それ故、類的能力、及びそれの対象化されたものである類の諸規定は個体としての人間においては 在するのは個体としての人間においてだけであり、この個体としての人間は世界のなかに、他人と共にしか存在しえ 類の完全性、無限性が個体としての人間にとって対象であるからである。類の完全性、 自分の有 認識した 類の無

他者もそれ自体としては制限されたものだった。 ける徳を、完全性を愛するのである。つまり、個体としての人間は友情において、友人の完全性と係わるのである。 の欠陥を友人の徳によってあがなうのである。わたし自身は完全でありえないとしても、わたしは少くとも友人にお の態度だけである。性受は性的区別の枠内における類の自己感情である。したがって、個体としての人間は性愛にお 限性を意識するのは、 りするが、このことはいかにして可能であろうか。フォイエルバッハによれば、人間の個体が自分の制限、 性受と友情という他者にたいする二つの態度に共通していることは、他者が類の媒介者である点である。しかし、 類の完全性と係わるのである。友情は補完衝動(Ergänzungstriebe)にもとづいたものである。友情はわたし フォイ**ボ**ルバッハにおいて、他者に対する関係は性愛(Liebe)と友情(Freundschaft)というたゞ二つ 制限されたものとの関係において、いかにして私は無限なもの、完

に、なんらかの仕方で友の完全さと係わる完全さを持っていないなら、私は友の完全さを完全さとして認めることさ さらに、友人において相対的な完全さに出会うとしても、私が友の完全さを実在的には欠いていても、もし私のうち 全なものと係わることが可能であろうか。 めに必要な多くの他人の代りをしてくれ、 なぜなら、もし他者が人類の代表者でありうるなら、他者からみれば私も人類の代表者でありうるのでなければ 私が人類の代表者であるなら、 私は私であるかぎりで、常に、既に無限なものと係わっているのである。 フォイエルバッハのように、この他者を人類の代表者、 わたしにとって普遍的な意義を持っている者に見立てることは不可能であ つまりわたしのた

人間が彼の本質を思惟することにほかならない。それ故、

人間が必然的に神を思惟することができるためには、

人間はそれが可能である。なぜなら、

人間とはその

本人間が、

が自分にとって必然的に対象であるととろの存在者であるから。は自分の本質を対象にすることができればよいわけである。人間

かなる仕方によっても、 えできないであろう。 それ故、 無限なものと係わることはできない。 個体としての人間 が単に制限されたものであるかぎり、 い ·かなるものによっても**、** 

間の 真なるものとして自己を人間にたいして証明する。それに反して、主語は述語によって規定されたものである。 性はもっぱら述語の必然性のうちに在る。 ほかならない。神的述語の主語は神ではなくて、人間の本質である。 を基礎づけるものは人格的な述語である。 方で一般的なものであり、 がって、 宗教は 慈悲深い者である、 制 限から引き離されて、 主語をして或るもので在らしめているものは、もっぱら述語のなかに横わっている。さらに、 · 人間を動物から本質的に区別するものにもとづいている。換言すれば、人間は必然的に、 人間はいかなる存在者でなければならないであろうか。フォイエルバッハによれば、 即ち、 人間は必然的になんらかの神を思惟する。ところで、 などという命題である。とれらの述語から、人格的な述語としての神的述語は人間的 他方では人格的なものである。一般的な述語は宗教の特徴的な規定ではない。 対象化されたものである。 述語は固 人格的述語とは、 例えば神は人格であり、 有の、 人間が神を思惟するとは、 独立な意義をもっている。 したがって、神的本質は人間の本質が個 人間が必然的に神を思惟することが 他の独自な本質としてではある 述語はその内容によって直 道徳的立法者、 神について主語の必然 なんらかの形で宗 神的 人間 宗教の本質 1述語 できるた の父、義 述語 の人

にとって対象であるとき、 したがって、 思惟の対象としての類の本質はなにを指しているのであろうか。人間が神を思惟 人間は必然的に神を思惟する。 しかし、 思惟 が成立するとき、 即 5 類 0) 本 するにあ 百分

から切り離し、対象化することができるであろうか。その時は、自分の制限を制限として感じることさえできないで だろうか。なぜなら、もし個体としての人間が単に制限された存在者であるなら、どうして人間の本質を自分の制限 ために、個体としての人間は個体としてのまゝで、なんらかの仕方において、無限なものと係わっているのではない 自分の本質を個体の制限から引き離すことは、空想においてだけ可能であるとしても、との分離が可能である

識であって、制限された意識は決して意識ではない。しかるに、類的能力は個体としての人間においては制限されて とができなかった。他者による間接的な関係を、私は退けた。それで、総体としての類は個体としての人間に バッハにおいて、私は二つの類の概念をみいだした。まず、総体としての類は個体としての人間と直接的に係わると さしくそのような存在者である。人間において、意識の対象である類はいかなる意味での類であろうか。 味での意識が存在するのは、或る本質にとってその類が、即ちその本質性が対象であるところでだけである。 あろう。 は無限なものについての意識を意識の無限性から説明している。けれども、意識は現実的には知覚的意識、 いた。それで、類的能力としての類は厳密な意味での意識の対象である類でありえない。確かに、フォイエ としての類は意識の対象であるようにみえる。しかし、フォイエルバッハによれば、意識は無限なものについての意 て、対象であることはできない。次に、類的能力としての類は個体としての人間に絶対的に帰属するので、 ととはできない。かくて、フォイエルバッハの二つの類の概念をもってするかぎり、人間において意識の対象である 他方、 想像的意識などとしてしか、存在しえない。知覚、理性、想像力などの類的能力は個体としての人間においては 人間を動物から本質的に区別するものは厳密な意味での意識である。フォイエルバッハによれば、 したがって、無限なものについての意識を、 対象の無限性からでなく、意識の無限性から説明する フォ 人間はま 厳密な意 ルバッハ おい ・エル

類 箭

能

力にかんして、

類に、 私 は達することができない。

体としての人間はなんらかの仕方で、 らかの結論を下す前に、 かしながら、 類についての別な概念をみいだせないかどうか、 自分を有限なものとして捉える人間、 フォイエルバッハが明確にしなかった点をよく考えるととにより、またとれまでの考察をと 端的に無限なものと係わっていることを、 及び神を必然的に思惟する人間についての考察によって、 その概念に基づいて、今逢着している困難を解決すること 私はみいだしていた。それ故、

#### 註

ができないかどうか、

考えることが残されているように惟われる。

- (1) Das Wesen
- (2)Das Wesen des Christentums.

## 回 新たな類の概念とそれら概念相互間の関係

とれらを受けいれるか、 て、絶対的に帰属すると言うことである。それで、人間はこれら類的能力を一方的に受けいれるほかない。つまり、 否かについて、人間の自由、 人間の主体性はまったくない。

個と類とは直接的な関係であった。とゝで直接的と言う意味は、

類は個に個の

思惟は思惟の基礎とその目標とをそれ自体のうちに持っているとしょう。意志も、心も、また同様であるとしょう。 な意味で人間の本質と言えるであろうか。例えば、思惟はなにに、基づいて、 ところで、類的能力とは理性、意志、心であった。理性、意志、心は人間の本質であった。この人間の本質は根源的 意志、 心はこのようなものであっても、 それにおいて統一され、それに基づいて互に協力することが なにに、

向って思惟するのか。

仮りに、

初めて可能となるものをもたねば、要のない扇の骨のようにばらくくで、

死んだものでしかないであろう。理性、意

しかし、

理性、

在り、 許されない仕方で、応えるべく規定されている。 おいて 絶対的に 規定されているのである。 人間は この規定の上で、 この規定に 照応すべく 生きる ことだけしかな 志 ての人間の本質を個を超えて個に帰属せしめる類こそ、 人間がいかなる存在であるかということは、個体としての人間の思惑や、意志を超えて、既にその成立の基点に 絶対的規定は人間の成立の基点に、個体としての人間に帰属するので、すべての人間はこの絶対的規定のもとに 心を生きたものたらしめるのは、これらを個の意志を超えて個に帰属せしめる類にほかならない。 生きて在るかぎり、 その都度新たに規定される。 この常に新たな絶対的規定にたいし、人間は応えないことの 根源的な意味で 人間の 本質と呼ぶことができる。 したがっ 類的能力とし

るものを、 意志、心を含めたすべての類的能力を個に帰属せしめ、人間をその本質において根源的に、 個を超えて個に帰属する類と私は呼ぶととにする。個を超えて個に帰属する類はいかなる媒介もなしに、 絶対的に規定す

端的に個と一である。

在的ということである。フォイエルバッハは 個と 類との 実在的な統一を不合理なものとして否定した。 この否定は まったく正当である。しかし、フォイエルバッハは総体としての類と個を他者の媒介によって間接的に関係づけた。 総体としての類にかんしては、 個と類とは直接的な関係ではありえなかった。とゝで直接的という意味は実

これにたいして、もし個が単に制限されたものであるなら、他者は個に総体としての類を媒介することができないこ

本質の現存在は相互に補完しあう無限の多である。とゝで言う人間の本質は総休としての類と同義である。個休とし いるであろう。いかなる仕方で係わっているであろうか。フォイエルバッハによれば、人間の本質は一であり、 私は示した。ところで、総体としての類は無限なものであった。それで、総体としての類は端的に個と係わって 個体としての人間は実在的な在り方ではないが、 他のなんらかの仕方で 端的に 無限なものと係わって いること その

ての人間であるフォイエルバッハは現実に多様な諸個人の無限の述語を一として表象している。したがって、もし総

象することは不可能であろう。 休としての類 一相互に補完しあう無限の多を本質において一であると、 が思惟において、 関係の在り方によって、 それ故、 総体としての類と個は実在的な在り方でなく、 フォイ 無限の多の中の一つにすぎないフォイエルバッハが表 エルバッハと端的に係 わっているのでなければ、 関係の在り方で、

に

端的に一である。

惟するもの、 沏 的能力としての類と総体としての類との関係は、 意志するもの、愛するものという人間の普遍的述語の限定内で、 対象化する能力とそれの対象化されたものとの関係 諸々の特定的な述語は対象化されるの である。 思

である。

はない。 体としての類、及び総体としての類についての意識を離れて存在しない。個を超えて個に帰属する類は人間の具体的 活動の土台であり、意味であり、裏側である。その限りで、 前者の存在は後者に依存してはいないが、後者が前者を離れて存在しえないように、個を超えて個に帰属する類は絵 る類の絶対的規定との関係において、 あった。 を超えて個に帰属する類といかなる関係にあるのだろうか。総体としての類は現実に多様な諸個人の無限の述語で 最後に、 ける全体たる総体としての類をとおして、 個を超えて個に帰属する類は関係の在り方における総体としての類と同一ではなく、 とゝで表現という意味は、 それ故、 とのさい、 関 「係の在り方で個即類である総体としての類は、 人類がこれまで対象化し、 述語とは対象化されたものである。対象化しうる能力も含めて、対象化は個を超えて個に帰属す 前者が人間の具体的活動に流出し、 絶対的規定にたいする人間の具体的な、 主体的な 応えとして行われる。 現に対象化し、またこれから対象化するであろうものの、 個を招えて個に帰属する類々概念的に捉えようとすることができる。 個を超えて個に帰属する類は人間の具体的活動に表現さ つまり総体としての類についての意識は、 溶けてみ、それと合体するというような意味で 前者は後者の土台である。 関係の在り方 先に規定した それ 43

とのようにしてなされる省際によって、私たちはその都度等たな絶対的規定にたいして、より適確に照応する手掛りを

お

# みいだすことができるし、またそうするほかない。

いという意味では無である。関係の在り方における総体としての類はこの無の無限の形而上的空間に、個を超えて個 だすととができず、なにものによっても説明されえない。個を超えて個に帰属する類は現実的であるが、感性的でな 個を超えて個に帰属する類は人間存在の成立の基点に、原初的構造として存在する。人間の存在が出来事としての いかなる説明も不可能であると同様、個を超えて個に帰属する類は原因の意味で、いかなるものからも引き

t

に帰属する類が、対象化する人間の活動を介して反射されたものである。

明確な仕方でなく、ぼんやりした仕方でなされている。その不徹底が大きな困難をひき起すことになった。 関係の在り方とは意識の在り方のことである。 関係という多義的な 用語をもちいたのは 実在という 言葉に対比させるため 類的能力についてのフォイエルバッハの規定は、とゝでいう人間の木質に触れており、踏まえられている。しかし、それは

と、意識という言葉を用いたさいに生じる観念論的印象を避けるためである。関係という用語のこのような使い方はサルトル

においてもみられる。cf. L'être et le néant.p.424 etc.

## 五、人間の本質についての規定

討と重複するところが生じるであろうが、事態を明確にするため、敢えて重複をおかそうと思う。 ての規定を整理し、それら規定間の関係を明らかにするのが適当であるだろう。そのさい、先に行った類の概念の検 いるか、それを明確にするため行われたのであった。したがってまず、フォイエルバッハにおける人間の木質につい をみいだした。ところで、類の概念の検討はフォイエルバッハにおいて人間の本質と呼ばれているものが何を指して イエルバッハにおける類の概念をみてゆくなかで、人間の本質についての規定が類の概念に対応していること

⑴、人間の 本質は理性、意志、心である。一個の 完全な人間には 思惟する力、意志する 力、心の力が帰属する。

思惟力は認識の光であり、 意志力は性格の力であり、 心の力は愛である。 理性、 **恋志力、** 愛は完全性であり、

諸力であり、人間そのものの絶対的本質であり、人間の定在の目的である。 がって、 间 は理性、 理性、 意志、心は人間が所有している力ではない。つまり、人間は人間の本質を持っているのでもなく、 意志、 心なしには無であり、 それらによってはじめて、 人はそれが在るところのものである。

定し、支配する力として、神的で、絶対的な諸力である。(2) た作りだすのでもない。そうでなくて、 理性、意志、心が人間の本質を基礎づける要素として、人間を生気づけ、 規

ま

種々な本質、 間の本質は種々な述語からなる無限の宮である。ととろで、 (2) 人間の本質の現実的な定在は本質の富を顕わすために相互に補完しあう無限の多様性である。- ( ) 或いは種々の諸個人の無限の充溢、 或いは集合においてだけ実現され、 現実に多様な 諸述語の 無限の充溢、 確証される。 それ故、 或は無限の集合は したがって、人 人間の本

が対象である。 質は種々な諸個人からなる無限の富である。(4) 本質との関係における生活である。 (3) 人間は二重の生活を持つ。 即ち人間は内面生活と外面生活とをもつ。人間の内面生活は自分の類との、 したがって、人間にとっては単に自分の個体性ではなく、 自分の類、 人間の本質 自分の

る」ところで、 人間の本質は宗教の根拠であるだけでなく、宗教の対象である。ところで、宗教は無限なものについての意識であ 「事実存在するということは人間にとって第一のことであり、人間の表象における根本本質であり、述語の前提であ したがって、 人間の本質は、 人間の類は無限な本質である。

感じる力である。 するものとして、 一個の人間が事実存在するとき、類的能力としての人間の本質、即ち理性、意志、心が絶対的に帰属 彼は事実存在する。理性、 したがって、一個の人間が事実存在するや、或るものを思惟するものとして、あるいは或るものを 意志、 心は或るものを思惟する力、 或るものを意志する力、 或るものを

が他方の土台である述語を、つまり理性、意志、心を、私は普遍的述語と呼ぶことにする。両者が共に述語であるの である。理性、意志、心は特定の諸述語を離れて、その外に存在することはできない。他方、これら特定の諸述語は 意志するものとして、あるいは或るものを感じるものをして事実存在する。つまり、特定の述語をその都度持つので 類的能力としての人間の本質である普遍的述語が人間を、主語をはなれて在りえないように、普遍的述語にもと 意志、心という類的能力にもとづき、その限定の内部で、それのとる特定の形としてしか現われえない。 人間がその都度選びとる諸々の述語は理性、意志、心という類的能力としての人間の本質の対象化されたもの 意志、心という述語を特定の諸述語から区別することができるし、また区別しなければならない。一方

の本質と総体としての類である人間の本質との関係は普遍的述語と特定的述語との関係にほかならない。 上記した(1)は普遍的述語であり、(2)は特定的述語である。それ故、(1)と(2)との関係は、 つまり類的能力としての人間

次に、上記山、20と30の関係はどうであろうか。30は山、20での人間の本質が人間にとって対象であるということ

ついて生ずる特定的述語も人間を、主語をはなれて在りえないからである。

**祭であることはできない。類的能力としての人間の本質の現実的な定在は、特定的述語として、無限の多として存在** されない。それで、総体としての類である人間の本質も個体としての人間にとって対象であることはできない。か する。しかるに、述語の無限の多は、フォイエルバッハによれば、諸個人の無限の多においてしか実現されず、 ての人間以外に、人間は存在しない。ところで、フォイエルバッハによれば、類的能力は個体において制限されてい にほかならないようにみえる。しかし、事実、⑴、⑵での人間の木質は人間にとって対象であるだろうか。個体とし 即ちそこでは、フォイエルバッハの二つの類の概念をもってするかぎり、人間において意識の対象である類に、 無限ではなかった。もし個がたんに創限されたものであるなら、類的能力としての人間の本質は人間にとって対 (1) (2)と(3)とは内的な連関をもつことができない。 これは三節において、 私の出会った事態と同じものであ

質についての新たな規定をみいだすことによって、 私 は達することができなかった。それで、 私は新たな類の概念をみいだす方向をとった。 (1) (2)と(3)とを、内的に連関づけることが可能であるように とゝでも同様に、 人間の本 111

根源的 れる。 が 人間にとって最初で最後であるもの、人間の生命の源であるものであり、そのようなものとして直接的に対象である 避けられることもなく、 威をもった、 人間をその本質において絶対的に規定するものとして人間に係わっているので、 て互に協力することが初めて可能となるもの、つまり人間をその本質において根源的に、 の ДΥ 節 感性的な対象とは異った仕方で対象となることを意味する。 『な意味での人間の本質とした。この意味での人間の本質は人間にとって、 10 能力を個に帰属せしめ、類的能力がそれによって基礎と目標を与えられ、それにおいて統一され、それに基づい おい 特殊な対象である。 て 私は類的能力としての人間の本質を根源的な意味での人間の本質ではないとした。そして、 いやおうなく、 「独特な権威をもった」という意味は、 人間にとって対象であるということである。 根源的な意味での人間の本質が、その都 端的に対象である。 人間によって取り去られることも、 「特殊な」というのは、 絶対的に規定するものを、 しかも独特な権 それは 度

係 方での総体としての類をとおして、人間の対象である。それ故、⑴、 は総体としての類についての意識にほかならなかった。 間の本質は概念的には、 0) 在り方での総体としての類をとおして、 関係の在り方での総体としての類をとおして近づかれる。 (3)と内的に結ばれる。 したがって、総体としての類である人間の本質は関 淅 (2)は根源的な意味での人間の本質に基づ 的能力としての人間の本質、 関係の在り方での総体としての類 総体としての類で の在

この根源的な意味での人間の本質は個を超えて個に帰属する類の別な表現であった。

それで、

根源的

な意味での人

ある人間の本質、

根源的な意味での人間の本質、及び関係の在り方での絵体としての類、

とれら四つは人間

の存在構

関 n

は問題を解決した。 かった。それで、類の概念の場合と同様、人間の本質についての新たな規定をみいだし、そうすることによって、私 との二つであった。両者は普遍的述語と特定的述語との関係であった。それらは人間にとって対象であるかのどとく フォイエルバッハにおける人間の本質についての規定は類的能力としての人間と総体としての類である人間の本質 フォイエルバッハの規定を守るかぎり、 それらは一個の人間にとって 対象となることが できな

体としての 類と 端的に係わっているので なければ、他者は人類を 代表することはできないであろう。なぜなら、他 おいて 出会ったものに ほかならない。フォイエルバッハにとって、人間の 本質は人間の 人間との結合、統一のうちに 役割りを、私が拒んだからである。他者に類の媒介者としての役割りを条件なしに認めるフォイエルバッハは、 う。そのとき、 人間の本質がそこにだけ在る人間の人間との結合、 統一とは、 一個の人間において 他の人間がなん であるから。けれども、 者は私の持つ諸述語を除いた、他のすべての人からなる無限の諸述語を体現することは、実在的に持つととは不可能 人の代りをしてくれ、 が他者との結合、統一においてだけ個体としての人間にとって存在するのは、他者がわたしのために必要な多くの他 しか存在しないのである。種々な諸個人の無限の充溢からなる現実に多様な諸述語の無限の充溢としての人間の本質 に私が当面した問題に出会わなかった。しかし、彼は別な問題に当面することとなった。別な問題とは、私が緒論に ところで、問題が生じたのは、個が単に制限されたものであるという条件のもとでは、他者に類の媒介者としての わたしにとって普遍的な意義をもっているからである。 いま仮りにフォイエルバッハが言うように、無条件に他は類を代表することができるとしよ しかし、もし私が関係の在り方での総

ない。 らかの 仕方で問題となる場合の存在構造ではなく、 或る人間の他の人間とのなんらかの結合、 統 の 状態にほ

か なら

とは或る人間の他の人間とのなんらかの統合、統一の状態であった。したがって、人間の本質、 次にこの全的な人間をより明確にするため、フォイエルバッハの著作に即して分節し、構造的に捉えようとした。そ 間の人間との結合のうちに、統一のうちにしか存在しない。ところで、いま見たように、人間の人間との結合、 りにした。 うとするフォイエルバッハの意図は即という点にかんして充分に実現されたと言うことはできない。 限なものは存在構造として一個の人間に帰属するのではない。それ故、一個の人間を有限即無限として認め、 のさい、哲学の課題は フォ 1 ェ 有限な人間において無限なものとは、人間の本質であった。フォイエルバッハにとって、人間の本質は人 ル バ ッハにおける哲学の主体であり、かつ客体でもある全的な人間を、私は緒論においてまず、 「有限なものを有限でないもの、即ち無限なものとして認めることである」という言葉を手掛 即ち人間における無 素描した。 捉えよ

### (6) (5) (4) (3) (2) (1) Das Wesen des Christentums. S. 3.

Ebd Ebd. S. 190 S. 28  $5.3\sim4$ 

Ebd. Ebd.

結

六

フォ

1

エ

ル

バ

び

それは身体をそなえた、 ッハにおい 感性的な人間 て積極的なものはまずその対象である。 世界のなかに、

他人と共に存在する生きた人間である。

彼

の哲学の対象は自我でも、

れ、人間を支配するこの対象を、人間の本質へと取りもどし、人間そのものに人間を超えて帰属する規定に即して生 は別な本質として、人間にとって対象である。人間は自分とは別な本質として対象化された自分を支えとし、旦標と 人間は自分の本質を自分のうちにみいだす前に、それを自分の外に立てるのである。そこでは、自分の本質が自分と ことである。人間は必然的に自己を対象化する。しかし、まず大抵、人間はこの対象を自分の木質として認めない。 次に、フォイエルバッハは人間の本質と、即ち自己自身と自覚的に係わり、自己との統一において生きようとした 価値として生きるのである。 これに反して、フォイエルバッハは 人間に対して外的で、 独自なものとして 現わ

のであること、つまりそれ自体で、即ちそれとは別な神的であるものを介することなしに、端的に神的であることを したがって最後に言えることは、フォイエルバッハはこの全的な人間が単に有限なものではなく、有限即無限なも

みいだし、認めたことである。

きようとした。

間そのものの本質として人間に還元したあと、さらにそのような対象化が可能である人間をその存在構造において明 ならなかった。したがって、人間を有限即無限なものとして捉えようとした意図は、即という点にかんしてずれを生 確にしようとしなかったことである。 そのため、 主体の内でありながら 主体を超えたものは 自覚的に考察の対象と あいまいになり、充分に実現されえなかった。 「イエルバッハの人間学における限界は、まず五節において明らかになったように、人間が対象化したものを人

一面的である。 サルトルの用語を借りれば、 反省的意識の 対象は反省以前的意識である。 反省以前的意識は即自存 次に、人間が対象化したものを人間そのものに還元するさい、フォイエルバッハは一方的に還元を行ったことであ 「上体が本質的、 - との命題によって、彼は考察を進めた。しかし、この命題は反省的意識の次元でも、反省以前的意識の次元でも - 必然的に係わる対象は この主体自身の本質にほかならない、 ただし対象となった 本質である

この命題にもとづいて考察を進めているわけではないが、それは彼において根本的な命題の一つであることに変りは の共同出資である。とれを主体にだけ還元することは不可能である。確かにフォイエルバッハ自身はいつの場合でも 在 (fitre-en-soi) に根ざされ、即自存在との関係としてのみ成立する。それで、反省以前的意識は主体と即 自存在と

ない。 最後に、フォイエルバッハは全的な人間を哲学の対象にしたが、内面生活にかんしてだけしか取り上げなかった。

他者にたいする関係の貧弱さ、社会にたいする無自覚さと共に、

フォイエル

誰

それ故、

マルクスも指摘するように、

バ

K.Marx: Deutsnhe Ideologie. (Die Frühschriften.heraus. S. Landshut) Das Wesen des Christentums. S.5.

(2) (1)

(本学文学部倫理学助手、 昭和四十二年度本学大学院博士課程退学、

S.351~S.354.

ッハは全的な人間をその全的な活動において捉えることができず、その意味で抽象的な人間学の域を出なかった。

倫理学)